

人

フランシス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界 (一)

秋山達子

フランシス・G・ウィックス夫人は、児童を対象とする数少ない精神分析関係の心理学者の中でも、特にC・G・ユングの教えの下に育った心理療法家の一人です。小学校専属の児童心理学者として出発し、多くの事例を扱ってきたウィックス夫人は後にユングに接する機会を持ち、ユング心理学の理論を基礎として九十余年の生涯を児童の心理療法の発展と向上に捧げられて、今から三年程前に亡くされました。

著書には「男性の内的世界」その他、お

となを対象としたものもありますが、やはり彼女の真面目が躍如としているのは、一九二七年に初版が出版された「幼年期の内的世界」でありましょう。ウィックス夫人はこの本でとりあげた事例の中の多くの子どもたちについて、その後四十年以上もその成長を見守られ、彼女の九十歳の誕生日を記念してこれらの人たちの長い成長過程の記録を加えた改訂版を数年前に出されましたが、このような彼女の生涯をかけた研究は高く評価されてよいものと思います。

そしてこの本がそれほど古い昔に書かれたものであるにもかかわらず、今もなお新鮮な感動を読者に呼び起こし、私どもに多く示唆するものを持っていることは、ウィックス夫人の実際に則した多くの経験とこれらに対する豊かな感受性と深い洞察とによるものでありましょう。

ウィックス夫人は一九二三年にチューリヒにユングを訪れ、それ以来ユングの指導の下に児童の無意識の問題について研究を深められました。この本はまたユングの

序文と共に出版されたことでも有名です。

これから三回にわたって、主としてこの『幼年期の内的世界』を中心にウィックス夫人の生涯をかけた努力とその成果の跡をたどってご紹介しようと思いますが、彼女の無意識の研究は、児童の社会への適応や不適応の理由には、意識的にははかり知れないものが多く、またなんとかして救いの手をさしのべようとする彼女の努力と熱意にもかかわらず、しばしばわけのわからない反抗に出合って、彼女自身の抑え難い感情からとり乱しかえって事態を悪くしてしまう結果を招くこともあるというような、臨床心理に携わるものが誰でも経験する苦い思い出から出発したものです。

なぜ楽しく気に話しつつづけていた子どもがある時点で突然話す力を奪われたように暗く押し黙ってしまうのであろうか。またなぜある年は元気でよく社会に適応しているように思っていた子どもが、その翌年には急に不適応を呈するのであろうか。子ども

が本来持って生まれた知性や感情はそれほど変化するものとは思われないが、これらの知性や感情はどこに消えてしまうのであろうか。またある子どもたちは家庭と学校とは違った態度を見せることがよくあるけれども、これはただ先生や両親による偏見や偏愛のためにのみ起こる問題であろうか。そして子どもとは一体どのような存在であろうか。

このような問題をかかえてウィックス夫人は、鋭い観察眼と暖かい愛情を持って、子どもの喜びを喜びとし、悲しみをそのまま受け入れながら、静かに用心深く子どもの心の中に入って行ったのです。そして幼年期の内的世界は幻想的でグロテスクで、時にはまったく意味もないと思われるようなさまざまな人格化された影のような姿で彩られ、その影のあやなす劇的な場面によって、子どもの人格形成が進められて行くことを発見したのです。このような子どもの内的な人格形成の過程をウィックス夫人

の言葉によって説明したいと思います。

人生の最初の正常な心理の発達は、基本的な人間関係の上に立つ安定感が重要な要素ですが、幼児の人格の形成の過程は決してやさしいものではない。子どもたちは常に多くの心理的な危機に見舞われ、しばしばあらわれてはまたいつとなく消える想像上の遊び友だちやお伽話の主人公に身を託してこれらの難問題の解決をはかります。

しかしこれらの幻想的な姿は、象徴的な仮面をつけていて、それほど簡単に見分けられるものではなく、ただ愛と共感と深い理解の下にのみ、真の姿をあらわすのです。抑圧された知識欲や愛情を求める心はしばしば怒りとなって表現され、また隠された不安や忘れられた経験、時にはずっと深いところにある集合無意識による不安は、恐れとなってあらわれ、悪夢や白昼夢や社会的な非行となって爆発します。このような無意識的な動機に対処するために、われわれは愛情と理解、そして直感的

な認識とまた無意識に対する技術的な知識が必要となるのですが、これらの知識は、学問的な理論や観念的な記録によっては得ることができないものであり、われわれは子どもたちから直接学ぶより他は獲得の方法もないのです。

子どもは非常に幼ない時代に内的な永遠の存在の経験を持つものですが、おとなになるにつれ外的な現実の問題に追われて、この経験は次第に忘れられて、意識の表面からは消え去ります。しかしこのような霊的な経験は心の深奥にとどまって、危機的な状態の時には再びどこからともなく出現します。われわれおとなは普段はこのような経験を忘れていたのですが、しばしば子どもたちと接する時に、再び思いを新たにすることができ、このような霊的な存在を感じることもできるのです。この霊的な存在こそ、ユングが深い洞察を持って感知し、そして彼を通して多くの人々に伝えられた人間の根源的な存在です。

このような洞察と発見の下にウィックス夫人は研究を続けられたのですが、その中でも児童の臨床的な心理学に対する最も大きな貢献は、子どもに与える両親の無意識的な影響についての研究であろうと思われまふ。次にこの問題についてウィックス夫人が扱われた事例に沿ってご説明することにしましよう。人格はもちろん感覚や反射や習慣などの外的な心理状況によって、その発展を促されるものですが、ウィックス夫人はここではこのような外的な理由にはあまり触れられずに、特に内的な理由を中心にとりあげています。

幼児の心理はほとんど無意識の状態にあつてその中で良い方向も悪い方向も共に可能性として持っているのです。そして最初はその状態から断片的な意識があらわれ、そのうちにこれらの断片は自我を中心として集まって、そこから人格形成が始まります。しかし子どもの自我はまだ深く無意識的なものと関連していて、その中に埋もれ

ているのです。子どもが肉体的にもまた経済的にも両親に依存しているものであることはよく知られています。子どもの無意識と両親のそれとの幼年期における連帯については、今まであまり考えられていなかったようです。しかしこれこそ、子どもの漠然とした不安や悪夢や時には社会的な非行にまで発展する大きな根拠となるものです。そして幼児は生理的には出生と共に母体からは独立をしますが、心理的な連帯はそのまま残って、ずっと後になって人格の形成が進むに従って次第に独立していきまふ。同じ家庭の同じ環境の下にあつても、子どもたちはそれぞれ違った特徴を持って育ちますが、しかし両親や家庭の無意識的な影響は子どもたちに大きく作用します。例えば五十歳になる男性が以然として母親との同一視的な関係から抜け切れずに独立をした人格を形成し得ないで問題を起こすことがあります。これによつてもわかるように内的な世界における連帯感是非常

に強いものであるばかりでなく、また危険でさえもあります。

しかし同時にこの連帯感こそまた子どもの心理に安定感を与えて、恐れなく外的な世界と対決し、それを受け入れて行く基本となるものであり、子どもは感覚によって外的な世界と接し、直感によって内的な世界と結ばれて、その間で自我を育て人格を形成していくのです。幼年期の内的世界は集合無意識の強い影響による不思議な幻想とお伽の国の世界ですが、またおとなの意識的な善悪感をこえた非合理の世界であり、言葉や理屈は通らないところであり、ただわれわれのありのままの姿のみが子どもとの接触の究極的なよりどころとなります。どんな善行も恐れと抑圧の上に築かれたものであれば、それはただ子どもたちに不信感を与えるだけに終わってしまうでしょう。良いことでも悪いことでも、ただ自分自身をまず真剣に受け入れようとする態度のみが素直に子どもの心に受け入れられ

るものです。人生には難かしい問題がありますが、子どもの心理に影響するのは問題の存在そのものではなく、われわれの問題に対処する時の態度です。もちろん子どもにはおとなの間の複雑な問題を話す必要はありませんが、しかし両親が真剣にこのようなことに取り組んだ場合は、たとえばどのような結果となっても、子どもはそれを素直に受け入れることができるでしょう。

ここに父親と深い連帯感を持った九歳になる少女がいます。父親は強い神経症に悩まされて、仕事も手につかず、社会に対しても壁を作って引きこもりがちでした。それにつれて彼女も食欲がなくなり悪夢に悩まされるようになりましたが、ある晩彼女は有名な英雄の母親になっている夢を見ました。この英雄は闘志を失ってどうしても戦おうとしないのですが、彼女はその英雄を激まして共に楯をとって戦場におもむくところでした。もちろんこの夢は彼女自身の問題に関するものではなく、父親の状態

を示しているものです。しかしこのような場合に子どもに対して、それはあなたの父親の問題です、などと説明しても意味がないどころか、かえって父親との連帯感を強めてかえって悪い結果となりましょう。

この少女の場合は父親が自分の問題の解決の糸口を見出すと同時に彼女の悪夢もおさまって平静の状態に戻りましたが、このように両親と子どもの間には強い無意識的なつながりがあるのです。

またある少女はやはり悪夢に悩まされ、学校の授業中にも勉強に集中できず、突然不安の発作に襲われる症状を示していましたが、彼女は裕福な実業家の娘として生まれ、母親もまた子どもに愛情深く、また別に彼女についている若いお手伝いさんもしんぼう強くやさしい性格のようで、経済的にも家庭的にも恵まれていて一見何の問題もなく思われました。この母親は子どもの時に自分の父親との良い接触を持ち得なかったために、かえって父親的な支配的男性

に憧がれて結婚したのですが、これはかえって彼女の女性としての成長を阻む結果となり、彼はいつまでもただ支配的な男性としてとどまり、彼女は女性としての感情をすべて子どもに向けることになりました。

彼女はまたこの子どもの生まれる少し前に自分の兄の旧友とある程度の親交を保っていたのですが、支配的な夫はこれを嫌って彼女に裏切りものの罪悪感を抱かせることに成功しました。それ以来彼女は罪の意識から犠牲的な気持で、ますます子どものためにのみ生きることになりました。このようにこの少女は一方では支配的な父親の強圧的な愛情の下にひきずりこまれ、また一方では母親の自分勝手な罪の償いの対象とされて、経済的にも愛情面でも決して不足してはいないにもかかわらず神経症的な症状を示すようになったのです。

家庭内には真の愛情がなく、両親は共に真の人格を持たず、ただ支配的な父親と犠牲的な母親という昔からの類型に生きる人

たちの間で、彼女は幼年期の人格形成に必要な両親との真の連帯感による安定した人間関係を持たずに育ってしまったのです。

夫婦間に愛情や理解が欠けている場合もしばしば子どもの心理に破壊的な影響を与えることがあります。このような場合は、子どもはよく発作的な愛情のための対象や両親の一方による愛情不足の代償に使われるのですが、それは愛情ではあっても両親の自己満足のためのものであり、現実には生産的な愛情とはなり得ないのです。もしわれわれが子どもの人格それ自体に直接根ざしたものではないものと関係を持つとすれば、それはただ子どもの心を傷つける結果に終わるだけです。母親の未発達な情緒面の犠牲となっていた息子が代表して女性との正常な関係を保ち得なくなる例はよく見られることです。

また不幸な結婚の結果としての事例。ある少年はわがままで嘘つきで、粗暴であるという理由で相談所に送られてきました

が、問題はただ彼自身にのみあるのではないことがすぐに察せられ、母親は第一回の面接の時から正直に、この子どもに対して小さい時から理由のない嫌悪感を抱いていることを告白しました。もちろん彼女はこれを態度に出さないように努め、母親としてするだけのことはしてきたのですが、ただ自分の息子の傍にいても嫌に感じられる時もあり、子どもの方はこのままの状態では信頼感や内的な洞察を持ち得ないであろうことは明白でしたので、まず母親の問題からとりかかるところにしました。

この少年の両親はまだ非常に若いうちに婚約したのですが、男性の方は長い婚約中に他に本当に愛する人ができてしまいました。彼女は婚約を破棄することを拒否しました。彼女は他の人の幸福を破壊する愛は真の愛ではないという考えを抑えて、「そのくらいの実は許してやってもよいほど自分は彼を愛している」ということで自分自身を納得させようとした。しかしな

がら自分が本当に愛されてはいないことは心のどこかでよく知っていましたから、なんとか男性の気持を惹きつけておこうとして、無意識的なヒステリーによる虚弱をよそおうことになりました。そこで彼は彼女の健康を気づかうあまりに、まったく彼女のいいなりとなり、献身的に彼女のために尽すようになりましたが、彼女はやはり自分は本当は愛されていないのだという不安感から逃れることはできませんでした。

この少年は大変に父親に似て育ち、彼女は自分の子どもの上にかつて自分を裏切った男性の姿を見ることになってしまったのです。意識的には裏切った男性である夫を許し、すべてを許したつもりの彼女も、無意識の中ではかつて起こった事実が忘れられなかったのです。父親は自分の失意を忘れるために仕事に没頭し、成功して家庭を豊かにすることで、自分の不満を含めた不実の代償をしようとしてました。

彼は若い時にある牧師から、名誉のため

に自分を犠牲にすることが最も尊いことであると教わったのですが、彼は約束を守る名誉のために彼自身を犠牲にしたのみならず、彼を真に愛した女性を犠牲にし、幼稚な権力欲と子どもっぽい依存の状態にあるわがままな女性を助けるために彼の生涯を捧げることになってしまったのです。

弱きものを助けることは、そのものがいささかでも強さを増す時にのみ意味のあることです。その反対に強きものも傷つけてしまうような時にはこのような美しい心もただ精神の死を招く結果となるだけです。また彼にとって意識的には家庭の幸福のためによく働くという行為も、無意識的には現実からの逃避でしかなかったのです。この少年はその結果として物質的な欲望のみを発達させ、母親の無意識的な敵意を友だちに投げかけて粗暴な行為となり、また父親のごまかしの生活から嘘言を学びとったのでした。この少年は母親の内的な心理状態が改善されると同時に良い方向に

向かいましたが、このように子どもは両親の無意識的な問題をそのまま受けついで情緒不安定となったり、また一方では社会的な非行へと走るようになるのです。

子どもの人格形成はこのように両親との間の安定した信頼感と人間関係の上に芽ばえるものですが、最終的には子ども自身の個人としての独立を目的とするものです。フランスス・G・ウィックス夫人はこの問題の結論として、子どもはわれわれが将来の道を開いてやるとやらないとにかかわらず、自分自身の道を求めて成長するものがあり、より大きく考えれば、われわれは結局子どもを将来を選んでやることはできないのであって、ただわれわれ自身の道を清めて、そこから子どもが彼自身の生涯を歩むためによりよい展望を持ち得るようにしてやることができるだけである。子どもの問題に悩む両親はまず自分の問題を素直に認めてその解決に真剣にあたるのが第一であろうと忠告しています。